

## 蘇軾作品にみえる飲食形容表現について

池間里代子

キーワード

形容 (description), 味・香り (flavor), テクスチャー (texture)

### 1. はじめに

蘇軾は北宋の政治家・詩人・書家であると同時に食通でも有名であった。今回は蘇軾の全作品（文・詩・詞）から飲食形容表現を抽出し、彼の傾向を考察するものである。

蘇軾は眉州眉山（四川省眉山市）出身、景祐3年12月19日（1036・1・8）一建中靖国元年7月28日（1101・8・24）。号を東坡居士、字を子瞻という。1057年に進士となり、地方官歴任後、英宗の時に中央へ入る。しかし次代の神宗期に王安石の新法に反対して左遷され、さらに1079年詩文で政治を誹謗したとのかどで投獄された後に黄州（湖北省黄州区）へ左遷となった。その地を東坡と名づけた。1085年哲宗即位により、旧法派が復権するとともに蘇軾も中央へ返還できた。しかし1094年再び新法派が主流となると、惠州（広東省）に流され、後に海南島にまで追放された。徽宗により新旧両党の融和が図られ、帰京を許されたが道中常州（江蘇省）で病死した。<sup>1)</sup>

本稿で使用したテキストは『蘇軾文集』第1～6冊・『蘇軾詩集』第1～8冊（中華書局 中国古典文学基本叢書1982年）・『蘇東坡詞全編』（四川文芸出版社2007年）である。

### 2. 飲食形容表現

飲食形容表現とは、「中国章回小説にみえる飲食形容表現」<sup>2)</sup>にもあるように、飲食それ自体ではなく、飲料・食品について作者がどのように形容したか、という点にある。前掲研究ノートでは飲料を酒と茶とに分けたが、その後蘇軾作品を調べた際に、水についての項目も必要があると感じた。そこで今回は水を設けた。食品は菜（料理）と点心

(果物を含む)に分ける。それらに対し味・香り (flavor) と質感 (texture) とその他 (主として視覚sight) についてさらに分類する。

なお、「甜爛 (あまくてやわらかい)」などの複合表現は先に書かれた方を優先する。

### 2-1. 味と香り (flと略称)

味についてはいわゆる五味 (甘味・苦味・酸味・塩味・旨味) の事であるが、旨味に関して中国語表現が一定していない。一応「好」「美」「佳」などを旨味に入れる。辞書では「美味・可口・好喫・香」が「旨い」, 「美味・味道好」が「旨味」の訳語となっている。また、「鮮」を「旨味」とする場合もある。なお、香りについては「香味兒」が「旨味」の訳語になるなど、味の付属のように表現されるので、本稿では味と香りとを区別しないこととする。

### 2-2. テクスチャー：質感 (texと略称)

テクスチャーという用語は1950~60年代に定着した言葉で、広く温感をも含めるといふ考え方もある<sup>3)</sup>。もともとラテン語で「織りなす」の意で衣類などの手ざわりを示す言葉として使用されていたが、現在は食品の分野でも非常によく用いられている<sup>4)</sup>。中国語では「質地」と訳されている<sup>5)</sup>。「細」「膩」もテクスチャーに入れる<sup>6)</sup>。

### 2-3. その他 (siと略称)

味・香り・テクスチャー以外のものを「その他」とする。ほとんどが視覚に関するものである。

## 3. 作品にみえる飲食形容表現

### 3-1. 飲

#### 3-1-a. 水

##### ①水 fl

死者鹹而生者甘 (文・卷1・p,15)

而鹹者一出而不復返 (文・卷1・p,15)

皆鹹而不能返, 故鹹者九而甘者一 (文・卷1・p,15)

甘而不壞 (文・卷1・p,15)

海洲之泉必甘, 而海雲之雨不鹹者 (文・卷1・p,15)

此寺井泉甘寒 (文・卷71・p,2262)

覺井水腥澀 (文・卷71・p,2268)

食餘甘 (文・卷71・p,2269)

- 皆甘而異常（文・巻71・p,2276）  
 泉甘而石峻（佚文・巻1・p,2419）  
 五行本水鹹（詩・巻1・p,29）  
 滑如流髓（詩・巻1・p,35）  
 居民來就水泉甘（詩・巻5・p,193）  
 猶不失芳甘（詩・巻5・p,206）  
 海畔居民飲鹹苦（詩・巻13・p,622）  
 龍井白泉甘勝乳（詩・巻18・p,954）  
 不愧惠山味（詩・巻20・p,1045）  
 乳水沉宜酒（詩・巻20・p,1050）  
 香濃奪蘭露（詩・巻22・p,1164）  
 君知先竭是甘井（詩・巻24・p,1193）  
 是家有甘井（詩・巻34・p,1791）  
 聲色與臭味（詩・巻34・p,1795）  
 瀉香泉（詩・巻34・p,1819）  
 惠山泉冷釀泉清（詩・巻48・p,2665）  
 水泉鹹苦（附録一・銘傳・p,2808）  
 自古珍泉（詞・p,445）  
 香泉（詞・p,512）

水に関しては「甘」が良い評価で、「鹹（塩からい）」が悪い評価となっている。その割合を見ると、大体同じ位の使用であるが、文に限定すると「鹹」が大変多い。「腥澀（なまぐさくて渋味がある）」という表現すらある。詩では「鹹苦」が2例見える。

また、「死者鹹而生者甘（死んでいる水は塩からく、生きている水は甘味がある）」と対比させてもいる。

これらの事から、蘇軾が水の味を表現する際にはうまいものはもとより、まずいものも積極的に用いていることが分かる。こうすることによって、うまい水が貴重ですばらしいものであることを強調する効果が得られる。

## ②水 tex

- 冷冽清心胃（詩・巻1・p,36）  
 開口吐清甘（詩・巻3・p,112）  
 野水清滑（詩・巻5・p,198）  
 玉池清水自生肥（詩・巻11・p,564）  
 吳興六月水泉温（詩・巻19・p,978）

- 溪水清可啜（詩・卷19・p,985）  
 故應千里共清甘（詩・卷21・p,1109）  
 乳泉發新馥（詩・卷22・p,1164）  
 豐腴面如粥（詩・卷22・p,1164）  
 由來薄滋味（詩・卷22・p,1165）  
 垂瓶得清甘（詩・卷23・p,1218）  
 鵝溪清絲清如冰（詩・卷31・p,1661）  
 井華入腹清而噉（詩・卷38・p,2079）  
 要知水味孰冷煖（詩・卷40・p,2190）  
 論極冰霜繞齒牙（詩・卷40・p,2194）  
 輕肥甘美形驕奢（詩・卷40・p,2212）  
 活水還須活火烹（詩・卷43・p,2362）  
 揚泉漱寒冽（詩・卷48・p,2627）  
 激齒冰雪繞（詩・卷48・p,2627）  
 灑作醍醐大地涼（詩・卷48・p,2634）  
 泉嫩石為厭（詩・卷48・p,2653）  
 老怯香泉灑寶樽（詩・卷36・p,1922）  
 天杯飲清露（詩・卷49・p,2728）  
 自攜修綆汲清泉（詩・卷50・p,2762）  
 真君堂下寒泉水（詞・p,576）  
 入袖寒泉不濕衣（詞・p,712）  
 瀉寒泉（詞・p,729）  
 冬夜夜寒冰合井（詞・p,822）

水の質感では「清」と「寒」が多い。特に「清」は29例中11ヶ所で使われており、「すっきり・さっぱり」をいう「清」を好んで用いていると言える。

冷たさを表現するのに、詩では「冷冽/冰霜/寒冽/冰雪/涼」などとヴァリエーションがあるのに対し、詞では「寒泉」が3例と「寒冰」のみが見られるにすぎない。おそらく詩では多様な表現を志向していたのであろう。また、「要知水味孰冷煖（水の味を知るには温度がどうだかに気を使うべきだ）」より、蘇軾は冷たい水に高い評価を与えている。「水泉温」ということから水温にこだわりがあった。

### ③水 si

- 水色如碧玉（文・卷71・p,2268）  
 白而不濁（文・卷1・p,15）

- 泉水白而甘（文・卷71・p,2255）  
 白而甘（文・卷71・p,2276）  
 色嫩欺秋菊（詩・卷22・p,1164）  
 一泓寒且碧（詩・卷48・p,2661）  
 白洲生綠珠（詩・卷49・p,2709）

水の視覚については「白」が目立つ。白とは混じりけがない・清い、というほどの意味であり、澄んだ水に高い評価を与えている。今一つは「碧・緑」である。特に「碧玉」は滑らかな表面を持つ、石のような硬質で深いグリーンを連想させる。「緑珠」は湧き出る清水がポコポコと珠を発生させている様を思い浮かべさせる。いずれも視覚に強く訴える表現と言えよう。

### 3-1-b. 茶

#### ①茶 fl

- 茶碾過日則香減（文・卷70・p,2227）  
 奇茶妙墨皆香（文・卷70・p,2227）  
 香味十倍常茶（文・卷70・p,2227）  
 茗飲芳烈（文・卷71・p,2265）  
 茶性新舊交，則香味復（文・卷71・p,2265）  
 分我花盆美味嘗（文・卷72・p,2315）  
 睡餘齒頰帶茶香（詩・卷11・p,552）  
 周詩記茶苦（詩・卷21・p,1119）  
 茶甘不上眉（詩・卷27・p,1438）  
 茶筍盡禪味（詩・卷31・p,1656）  
 飲茶甘苦雜（詩・卷32・p,1708）  
 看分香餅（詞・p,599）

文では全て「香・芳」と形容しているが、詩に「苦・禪味」などが見える。「苦（古はひきしめる，意。口に入れて噛むと口内が引き締まる味のする草，にがな。そこからにがい，に転じた）」は茶の属性の一つである。それゆえに「甘苦雜（甘味と苦味とが混じりあっている）」と表現したのである。中国では「苦」を「にがい」「くるしい」と分けて発音しないため，語感として「苦」はマイナスイメージを持っている。それを「甘苦」のように「甘」が先ではあるが，敢えて詩に「苦」字を用いたところに蘇軾の独自性がある。

「禪味」とは，俗気を離れた趣・境地を言い，蘇軾が茶と筍に対して讃辞を述べてい

ると理解できる。

②茶 tex

- 茶以新貴（文・巻70・p,2227）  
 濃茶漱口，煩膩既去（文・巻73・p,2370）  
 想見新茶如潑乳（詩・巻7・p,328）  
 且將新火試新茶（詞・p,164）  
 玉粉旋烹茶乳（詞・p,476）  
 子瞻書困點新茶（詞・p,882）

茶の質感では「新」がキーワードとなろう。

また、「濃茶漱口（濃い茶で口をすすぐ）」という表現もあり、茶は飲むだけではなく口内の清潔の為にも用いられたことが分かる。時代が下って清代18世紀中葉に成立した『紅樓夢』第3回にも林黛玉が食事直後に運ばれた茶をいぶかしんでいると、うがい盆が供されたので口すすぎ用の茶であると合点する場面がある。

③茶 si

- 茶欲其白，常患其黑（文・巻70・p,2227）  
 寺僧謙出奇茗如玉雪（文・巻70・p,2227）  
 象白暗，亦可以名茶（文・巻70・P,2230）  
 茶以白為尚（佚文・巻6・p,2577）  
 農夫免菜色（詩・巻19・p,966）  
 新火發茶乳（詩・巻34・p,1846）  
 雪沫乳花浮午椀（詞・p,550）

蘇軾の時代、茶は固く点てられて表面の泡がミルク状になるものが理想的だった。また、白磁の茶碗に固く点てた茶の表面が白く、その境界が分からないくらいのものが流行した。<sup>7)</sup> 蘇軾は「白」を「玉雪/雪沫乳花」のように「雪」に例えた。混じりけなしの・まっ白な、というニュアンスを出すのに「雪」は大変有効に思う。

3-1-c. 酒

①酒 fl

- 味甘餘而小苦（文・巻1・p,12）  
 知甘酸之湯懷（文・巻1・p,12）  
 味盎盎其春融兮（文・巻1・p,14）

- 始従味入（文・卷1・p.21）  
得意忘味（文・卷1・p.21）  
以伊尹為以滋味說湯者（文・卷2・p.37）  
必有草木之滋焉（文・卷20・p.593）  
香味超然（文・卷20・p.593）  
甘終不壞醉不醒（文・卷20・p.593）  
故當有善酒（文・卷73・p.2368）  
官醜又惡又貴（文・卷73・p.2369）  
不甜而敗（文・卷73・p.2369）  
苦硬不可向口（文・卷73・p.2369）  
有自然香味（文・卷73・p.2372）  
酒甚佳（佚文・卷2・p.2450）  
格味與真一相亂（佚文・卷5・p.2537）  
味當極辣且硬（佚文・卷5・p.2538）  
臨池飲美酒（詩・卷3・p.121）  
身閑酒美誰來勸（詩・卷3・p.122）  
花間酒美蓋言歸（詩・卷3・p.151）  
如飲美酒消百憂（詩・卷6・p.236）  
是中惟可飲醇酒（詩・卷6・p.243）  
中流歌嘯倚半酣（詩・卷7・p.309）  
不如西湖飲美酒（詩・卷9・p.434）  
半酣味尤長（詩・卷9・p.440）  
國色初酣卯酒來（詩・卷9・p.446）  
十千美酒渭城歌（詩・卷9・p.447）  
但知撲撲晴香軟（詩・卷11・p.555）  
船中著美酒（詩・卷13・p.617）  
何當閉門飲美酒（詩・卷15・p.715）  
新詩美酒聊相溫（詩・卷15・p.775）  
對花把酒未甘老（詩・卷17・p.885）  
白酒微帶荷心苦（詩・卷19・p.976）  
齋釀酸甜如蜜水（詩・卷19・p.982）  
樽中有淚酒應酸（詩・卷20・p.1085）  
如酒美（詩・卷21・p.1117）  
酸酒如薺湯（詩・卷23・p.1208）  
甜酒如蜜汁（詩・卷23・p.1208）

- 一醉兩翁勝酒美（詩・卷23・p,1223）  
 君知蒲萄惡（詩・卷34・p,1836）  
 搗香篩辣入瓶盆（詩・卷38・p,2077）  
 招呼明月到芳樽（詩・卷38・p,2077）  
 家家臘酒香（詩・卷39・p,2162）  
 酸甜如梨楂（詩・卷40・p,2204）  
 旨酒荔枝，絕甘分珍（詩・卷40・p,2224）  
 一醉醇美（詩・卷41・p,2257）  
 美酒生林不待儀（詩・卷41・p,2268）  
 清酒引樽壺（詩・卷43・p,2357）  
 玉觴無味（詞・p,265）  
 清香細細嚼梅鬚（詞・p,341）  
 美酒一杯誰與共（詞・p,411）  
 千鍾美酒（詞・p,459）  
 酒味多於淚（詞・p,541）  
 酒闌滋味似殘春（詞・p,764）  
 猶帶春醪紅玉困（詞・p,815）  
 緩步困醪（詞・p,844）  
 憑君會取這滋味（詞・p,902）

酒の味に関して、文と詩では傾向が異なる。文では「甘/甜/佳/滋」のような良い評価の言葉とともに「苦/苦硬/辣」などの悪い評価の言葉が多く使用されている。対して詩にはほとんどが「美（うまい）」である。とりわけ、「白酒微帶荷心苦（白酒には蓮実の苦味をやや帯びる）」では「苦」字を使用しているにもかかわらず、ここでは良い評価であることに注目したい。酒の中にほんの少し感じる「苦味」を表現したもののだが、味覚の優れている人でないと表現できないものだろう。蘇軾は文人グルメの筆頭格であり、自作の料理も伝えられている。作品中に飲食が多いのも特徴である。その蘇軾が「詩」に「美」を多用しつつも、「微帶荷心苦」のような微細な表現を作り上げることができた点に感嘆せざるを得ない。

なお、詞では詩に一つも用例のない「滋」が2例見える。

## ②酒 tex

- 似玉池之生肥（文・卷1・p,12）  
 餉滑甘，輔衰朽（文・卷1・p,14）  
 氣凜冽而秋凄（文・卷1・p,14）



- 釀為我醪淳而清（文・卷20・p,593）  
 日給淳酒（文・卷21・p,612）  
 醺然徑醉（文・卷71・p,2265）  
 高人著屐踏冷冽（詩・卷1・p,21）  
 冷酌不成席（詩・卷3・p,120）  
 惟思近醇醲（詩・卷4・p,158）  
 臨行怪酒薄（詩・卷7・p,330）  
 酒醲（詩・卷7・p,365）  
 酒薄僅堪盃（詩・卷13・p,615）  
 薄薄酒（詩・卷14・p,687）  
 薄薄酒，勝茶湯（詩・卷14・p,688）  
 莫嫌酒薄（詩・卷17・p,868）  
 熱酒（詩・卷17・p,868）  
 薄酒知君笑督郵（詩・卷19・p,983）  
 白酒無聲滑瀉油（詩・卷20・p,1017）  
 飲中真味老更濃（詩・卷20・p,1033）  
 江城白酒三杯醲（詩・卷21・p,1105）  
 杯酒暖寒栗（詩・卷21・p,1106）  
 絕醇醲（詩・卷21・p,1115）  
 甘露微濁醞醑清（詩・卷21・p,1116）  
 揚州雲液卻如酥（詩・卷24・p,1304）  
 佳人苦膠杯（詩・卷34・p,1821）  
 茲游實清醇（詩・卷34・p,1847）  
 脫衣裹凍酒（詩・卷35・p,1885）  
 客至先飲醇（詩・卷35・p,1891）  
 得酒忘醇醲（詩・卷36・p,1929）  
 萬戶春濃酒似油（詩・卷48・p,2596）  
 雷觴淡於水（詩・卷49・p,2730）  
 呼兒其濁酒（詩・卷50・p,2772）  
 但把清尊斷送秋（詞・p,331）  
 濃斟琥珀香浮蟻（詞・p,902）

酒の質感では圧倒的に「濃・薄」が問題となっており、当然「濃」が良い評価である。ただ、「薄薄酒」という詩があり、ユーモラスに薄酒を嘆いているのが蘇軾流であろうか。これら以外では「醲」が散見する。この文字は「中国章回小説にみえる飲食形容

表現』の『紅樓夢』項でも指摘した。再録すると「この文字は『説文解字』では「醎」という文字で載っており、元の意味は酢であった。<sup>8)</sup>その後唐代になると「酒」という意味で使う用例が見られ<sup>9)</sup>、後に「酢や酒が濃い」という意味に転じた。<sup>10)</sup>そして「茶が濃い」という意味が持たれるようになった。<sup>11)</sup>」ということである。ここでは「濃」よりもさらに濃い表現として「醎」を使用しているとみられる。

「白居易作品に見える飲食形容表現」<sup>12)</sup>で述べたように、白居易の酒質感表現では、単純に「美(うまい)」という例も7例みえるが、それよりも「濃(こい)」13例、特に「錫(あめのように)」4例、「緑蟻(緑色のとろりとした酒の上に蟻のように滓が浮かんでいる)」6例がみえる。しかも白居易の造字かとも思える「醎」という文字が使用されている<sup>13)</sup>。「錫」と「緑蟻」とは「飴」「蟻」の連想で、ほぼ同義と考えられよう。つまり、「緑色をした飴のようにとろりとした飲み口の酒」の描写が多い。これを踏襲したと思われる表現が詞に「濃斟琥珀香浮蟻」とあることを指摘しておく。

### ③酒 si

- 湛若秋露，穆如春風（文・卷1・p,21）  
 疑宿雲之解驕，漏朝日之噉紅（文・卷1・p,21）  
 釀成玉色（文・卷20・p,593）  
 秋熟未已而酒白色（佚文・卷5・p,2541）  
 惡酒如惡人，相攻劇刀箭（詩・卷11・p,545）  
 飲我玉色醪（詩・卷16・p,797）  
 一壺春酒若為湯（詩・卷20・p,1043）  
 齊釀如滄漲綠波（詩・卷25・p,1325）  
 相逢卵色五湖天（詩・卷33・p,1763）  
 臘酒是黃柑（詩・卷37・p,2014）  
 千金琥珀杯（詩・卷46・p,2489）  
 黃雞白酒雲山約（詩・卷47・p,2548）  
 玲瓏綠醪醴（詩・卷48・p,2618）  
 萬傾蒲萄漲淥醅（詞・p,288）  
 蒲萄深碧（詞・p,335）  
 小槽春酒凍真珠（詞・p,341）  
 天寒酒色轉頭無（詞・p,343）  
 紅酒白魚暮歸（詞・p,380）  
 一江醇酎（詞・p,429）  
 白酒新開酒九醞（詞・p,476）  
 白酒無聲滑瀉油（詞・p,566）

- 瀉鵝黃（詞・p,607）  
 酒花穠（詞・p,657）  
 輕紅釀白（詞・p,757）  
 清歌一曲倒金壺（詞・p,834）  
 金尊灑玉醅（詞・p,853）  
 孤負金尊綠醅（詞・p,871）

酒（その他）の形容としては、蘇軾独特の表現が見える。例えば「湛若秋露，穆如春風（秋露のようにたゆたい，春風のようにそよぐ）」「疑宿雲之解驕，漏朝日之暎紅（乗物を乗り捨てて雲にふんわりと乗ったよう，真っ赤な朝日が差し込んだよう）」「惡酒如惡人，相攻劇刀箭（悪い酒は悪人のようだ，刀と弓矢とで攻めてくる）」などが見える。今風に言えばワインソムリエが述べるようなものだろうか。

当然ながら「白・緑」などの定番も多く見られる。「玉色・碧」などのつややかな硬質感ある形容表現も見える。なお，白酒báijiǔはアルコール度数の高い，透明な酒として現代では茅台酒などの名で有名だが，蒸留酒の製法は元代アラビア経由で中国に伝わったのが定説なので<sup>14)</sup>，蘇軾の言う「白酒」は文字通り「白い酒」と解釈して構わない。

### 3-2. 食

#### 3-2-a. 菜

##### ①菜fl

- 甘且腴兮（文・卷1・p,5）  
 而有自然之味（文・卷1・p,17）  
 屏醢醬之厚味，卻椒桂之芳辛（文・卷1・p,17）  
 信淨美而甘分（文・卷1・p,17）  
 豬解而腥之（文・卷2・p,57）  
 而知其所以為美（文・卷4・p,113）  
 疢之美者，其毒滋多（文・卷4・p,132）  
 禁切其飲食之美者（文・卷11・p,346）  
 氣完而食美矣（文・卷11・p,346）  
 不用魚肉五味，有自然之甘（文・卷20・p,595）  
 去辛苦汁（文・卷20・p,595）  
 甘苦嘗從極處回，鹹酸未必食鹽梅（文・卷20・p,595）  
 天真味（文・卷20・p,595）  
 火候足時他自美（文・卷20・p,597）  
 掇齋菜食之，甚美（文・卷71・p,2265）

- 齋青蝦羹，食之甚美（文・卷71・p,2265）  
 家人煮雞腸菜羹甚美（文・卷71・p,2270）  
 今但覺甘美而已（文・卷2346）  
 一味極苦（文・卷73・p,2347）  
 異常甘香（文・卷73・p,2350）  
 殊甘美（文・卷73・p,2357）  
 亦頗苦澀（文・卷73・p,2357）  
 甘嗜毒（文・卷73・p,2376）  
 自然甘酸浮滑（文・卷73・p,2380）  
 然尚未甚美食（佚文・卷1・p,2443）  
 啖麩食鼠為太靡麗（佚文・卷4・p,2506）  
 食之甚美，未始有也（佚文・卷6・p,2592）  
 不稱善（佚文・卷6・p,2592）  
 此羹超然有高韻（佚文・卷6・p,2592）  
 玉醴珍饌（佚文・卷7・p,2608）  
 魴鱖肥兮香芳（佚文拾遺・卷上・p,2639）  
 香粳淳釀（佚文拾遺・卷上・p,2651）  
 惠貺珍味（佚文拾遺・卷上・p,2651）  
 粥既快美（佚文拾遺・卷下・p,2679）  
 餐霞絕粒長辛苦（詩・卷1・p,19）  
 新味時所佳（詩・卷2・p,79）  
 新筍出林香（詩・卷5・p,199）  
 香粳飽送（詩・卷5・p,213）  
 那因江鱸美（詩・卷6・p,246）  
 飽食未厭山蔬甘（詩・卷7・p,309）  
 送老齋菜鹽甘似蜜（詩・卷7・p,325）  
 相攜燒筍苦竹寺（詩・卷7・p,339）  
 船尾炊玉香浮浮（詩・卷7・p,339）  
 調和椒桂醢（詩・卷8・p,367）  
 粳稻熟苦遲（詩・卷8・p,404）  
 慚愧春山筍蕨甜（詩・卷9・p,438）  
 不嫌溪筍瘦（詩・卷9・p,450）  
 凶年偏覺野蔬香（詩・卷11・p,539）  
 苦筍江豬那忍說（詩・卷16・p,790）  
 美惡更臭香（詩・卷16・p,835）

- 霜蟹初有味（詩・巻17・p,865）  
 江繞郭知魚美（詩・巻20・p,1032）  
 好竹連山覺筍香（詩・巻20・p,1032）  
 辛苦真食蓼（詩・巻20・p,1034）  
 味如蜜藕和雞酥（詩・巻20・p,1048）  
 冬不加甜夏不酸（詩・巻21・p,1117）  
 乾鍋更戛甘瓜羹（詩・巻21・p,1120）  
 至樂甘不壞（詩・巻22・p,1171）  
 多生味蠹簡（詩・巻22・p,1171）  
 搗殘椒桂有餘辛（詩・巻28・p,1492）  
 茶筍盡禪味（詩・巻31・p,1656）  
 臭味終祖禰（詩・巻39・p,2156）  
 涯蜜助甘冷（詩・巻39・p,2158）  
 山薑發芳辛（詩・巻39・p,2158）  
 病怯腥鹹不買魚（詩・巻41・p,2258）  
 香似龍涎仍皜白（詩・巻42・p,2317）  
 味如牛乳更全清（詩・巻42・p,2317）  
 寒庖有珍烹（詩・巻44・p,24129）  
 山腰苦筍耿盤蔬（詩・巻48・p,2665）  
 水晶鹽,為誰甜（詞・p,347）  
 金盞新擣橙香（詞・p,476）  
 一般滋味,就中香美（詞・p,913）

酒の味には文・詩に傾向の違いが見られたが、菜の味では観察されなかった。概ね「甘」と「苦」が目立ち、「美」も文ではかなりある。日本語の「うまい」は果物が実る「うむ」が語源だとするが、実際には「美」が語源ではないだろうか。「美」は羊が肥えていることから、味がよいという意味を持つ。視覚的に「うつくしい」という意味は派生義であり、原義はあくまでも「うまい」だ。中国語「m」が日本に入って来た段階で「う」に変換する例も多い。例えば「馬 ma→うま」「梅 me i→うめ」がそうである。すると「美 me i→うまい」という説も成り立つのではないだろうか。

なお、「滋」にも「うまい・味が良い」という意味があり、こちらは口中の唾液がどんどんと分泌されることが語源で、いわば記憶が脳を刺激して「うまい」と感知することをいったものか。詞には「一般滋味,就中香美(ふつうのうまさの中に、香と味のすぐれたものがある)」と、「うまい」を重層使用して強調するものがある。

## ②菜 tex

- 燂黍裨豬，以為靡矣（文・卷6・p,172）  
 飯熟羹亦爛可食（文・卷20・p,595）  
 嚼之如乳（文・卷73・p,2345）  
 嚼之瑟瑟有聲（文・卷73・p,2357）  
 乃熟噉之，則鬆而膩（文・卷73・p,2365）  
 以桑灰水煮爛（文・卷73・p,2384）  
 軟蒸飯，爛煮肉（佚文・卷1・p,2421）  
 爛蒸同州羊羔（佚文・卷6・p,2591）  
 紫荀發清乳（詩・卷7・p,344）  
 咀嚼沙礫礮（詩・卷8・p,367）  
 識味肯輕飽（詩・卷8・p,423）  
 骨清肉膩和且正（詩・卷11・p,530）  
 啜過始知真味永（詩・卷11・p,530）  
 爛蒸香薺白魚肥（詩・卷16・p,790）  
 肉食嘗苦墨（詩・卷16・p,815）  
 爛蒸鵝鴨乃瓠壺（詩・卷21・p,1116）  
 紫蟹應已肥（詩・卷29・p,1522）  
 共此煖熱餐（詩・卷34・p,1822）  
 爛煮葵羹（詩・卷38・p,2078）  
 十年京國厭肥羜（詩・卷41・p,2258）  
 輕比東坡玉糝羹（詩・卷41・p,2317）  
 夜庖炙肥牛（詩・卷48・p,2603）  
 便須起來和熱喫（詩・卷48・p,2630）  
 普天冷食聞前古（詩・卷48・p,2640）  
 鮮鯽經年祕醞醖（詩・卷49・p,2718）  
 先社薑芽肥勝肉（詩・卷49・p,2718）  
 藕絲嫩（詞・p,203）  
 桃花流水鰕魚肥（詞・p,370）

菜の質感では「爛/軟/嫩/輕/鬆」などのやわらか系や「嚼之瑟瑟有聲（噛むとサクサク音がする）」というクリスプ系、「肥（こってり）」などヴァリエーションが多い。とくに「爛蒸・爛煮」が複数見えることから、蘇軾は調理方法にも興味と関心を持っていたことが分かる。真偽のほどは不明ながら「東坡肉（豚の角煮）」発明者としても蘇軾は名高い。「爛（崩れるほど煮込んでやわらかい）」を好むのも頷ける。

## ③菜 si

- 則背鱗黑而味惡（文・卷73・p,2373）  
 船頭斫鮮細縷縷（詩・卷7・p,339）  
 笑看魚尾更莘莘（詩・卷32・p,1707）  
 遂令色香味（詩・卷35・p,1880）  
 辛盤得青韭（詩・卷37・p,2014）  
 紅點冰盤鱖葉魚（詩・卷39・p,2103）  
 北嶺紫筍長（詩・卷39・p,2105）  
 赤魚白蟹箸屢下（詩・卷39・p,2148）  
 紫筍生臥節（詩・卷39・p,2158）  
 紅藟與紫芽（詩・卷40・p,2216）  
 紫筍雖不長（詩・卷40・p,2225）  
 便作紫筍茁（詩・卷41・p,2279）  
 黃雞白酒雲山約（詩・卷47・p,2548）  
 山人更喫懶殘殘（詩・卷48・p,2628）  
 團臍紫蟹脂填腹（詩・卷49・p,2718）  
 後春蓴茁活如酥（詩・卷49・p,2718）  
 黃甘紫蟹見江海（詩・卷49・p,2719）  
 紅稻白魚飽兒女（詩・卷49・p,2719）  
 春色屬蕪菁（詞・p,166）  
 肥圃寒蔬挑翠羽（詞・p,341）  
 但絲蓴玉藕（詞・p,422）

菜の視覚表現では、色彩語の豊富さが挙げられる。ざっと見ただけでも「黒/青/紅/紫/赤/白/黄/翠」というように、鮮やかだ。この中で「紫」の使用、とりわけ「紫筍・紫蟹」の用例が目立つ。

「紫筍」とは地面からやっ穂先を出したばかりの、出たての筍を形容しており、まだ陽に当たっていない外皮を「紫」としたもの。新鮮で、筍の風味が想像できる表現である。筍は蘇軾が最も好んだといえるほど詩に詠まれており、「噴飯」の語源でもある。<sup>15)</sup>

「紫蟹」はまだ生きている蟹を言ったもので、これから蒸すなど調理することで色は橙に変化する。鮮度の良い、美味しそうな表現である。

筍・蟹だけでなく、蓴（ジュンサイ・スイレン科の多年草で、江南地方に自生する。深緑色で粘液質に包まれている。）や藕（ハス）も見える。蓴は「蓴羹鱸膾（宮仕えをしていても故郷である江南の名物であるジュンサイの吸物と鱸魚（カジカ一種）のな

ますがなつかしく思い出される)」という成語に見える、江南を代表する食材である。<sup>16)</sup> 藕もまた江南を代表する食材である。と同時に「恋」を暗示するものでもある。江南地方民謡－呉歌－の特徴として双関語（掛け言葉）が挙げられ、本邦でもそうだが、特に恋愛を歌う場合にはストレートな表現を避け、言葉に裏の意味を持たせて表現することがある。例えば「蓮lián」と「恋lián」とが同じ発音であることから「ハス=恋」となる。「藕ǒu」も「偶ǒu（配偶）」と同音なので、結婚のメタファーである。

このように、蘇軾は江南の食材を好み、それを微細に形容することが観察された。

### 3-2-b. 点心

#### ①点心 fl

- 食薑粥，甚美（文・卷72・p,2293）  
 瓜至甘而不蠹者（文・卷73・p,2362）  
 輿論蒸餅之美（文・卷73・p,2369）  
 鳳味堂前野橘香（詩・卷8・p,376）  
 紅杏碧桃香覆髻（詩・卷9・p,434）  
 紫李黃瓜村路香（詩・卷10・p,475）  
 戴工山下野桃香（詩・卷11・p,538）  
 朱柑綠橘半甜時（詩・卷12・p,585）  
 夏蠶風來餅餌香（詩・卷14・p,678）  
 盧橘楊梅尚帶酸（詩・卷18・p,946）  
 數點微酸已著枝（詩・卷21・p,1107）  
 金盤玉指破芳辛（詩・卷22・p,1158）  
 正味森森苦且嚴（詩・卷22・p,1182）  
 待得微甘回齒頰（詩・卷22・p,1182）  
 已輸涯蜜十分甜（詩・卷22・p,1182）  
 野橘香清未過淮（詩・卷24・p,1299）  
 酸醜不堪調眾口（詩・卷33・p,1740）  
 味如苦筍而加甘芳（詩・卷33・p,1756）  
 苦澀不可食也（詩・卷33・p,1756）  
 三寸黃柑擘永嘉（詩・卷37・p,2014）  
 甘冷恐不如（詩・卷39・p,2105）  
 豈惟牢丸薦古味（詩・卷39・p,2112）  
 奇孤甘挂汲古綆（詩・卷39・p,2113）  
 紅紗中單白玉膚（詩・卷39・p,2121）  
 更洗河豬烹腹腴（詩・卷39・p,2122）



- 筠籃擷翠爪甲香（詩・卷39・2148）  
吸津得微甘（詩・卷39・p,2153）  
著齒隨亦苦（詩・卷39・p,2153）  
滋味絕媚嫵（詩・卷39・p,2153）  
脆美牙頰響（詩・卷39・p,2161）  
明年更有味（詩・卷40・p,2183）  
分甘遍鈴下（詩・卷40・p,2193）  
端如甘與橘（詩・卷43・p,2368）  
一一流膏乳（詩・卷43・p,2368）  
菰黍獻時芳（詩・卷46・p,2487）  
瑤盤饗餌新（詩・卷46・p,2489）  
異味誰栽向海濱（詩・卷48・p,2638）  
可療飢懷香自吐（詩・卷48・p,2638）  
自然冰玉照香酥（詞・p,195）  
細看重嗅（詞・p,428）  
香霧噴人驚半破（詞・p,745）  
清泉流齒怯初嘗（詞・p,745）  
吳姬三日手猶香（詞・p,745）

点心は蘇軾作品においてほとんどが楊梅・荔枝・龍眼・檳榔・茱萸・金柑などの果物である。その形容は「香」が多く、「甘・苦」もあり、「酸醜」という語も見える。しかし、果物以外の点心は「美」で表現している。

「紫李」という表現があり、「李（スモモ）」の若々しい様子が表現されている。

②点心 tex

- 爛櫻珠之煎蜜，滄杏酪之蒸羔（文・卷1・p,16）  
爛熟可愛（文・卷71・p,2254）  
其名為甚酥，味極美（文・卷71・p,2258）  
而芡無五味，腴而不膩（文・卷73・p,2337）  
然酒闌口爽（文・卷73・p,2364）  
柔柯已不勝（詩・卷3・p,138）  
從向口中溥（詩・卷3・p,138）  
櫻桃爛熟滴階紅（詩・卷14・p,679）  
碎點青蒿澆餅滑（詩・卷16・p,790）  
火冷錫稀杏粥稠（詩・卷18・p,931）

- 脆齏紅螺醬（詩・卷21・p,1091）  
 蔗漿酪粉金盤冷（詩・卷21・p,1092）  
 更覓君家為甚酥（詩・卷22・p,1191）  
 何以糖霜美（詩・卷24・p,1269）  
 沙瓶煮豆軟如酥（詩・卷24・p,1272）  
 溫風散粥錫（詩・卷34・p,1846）  
 社酒粥面醲（詩・卷37・p,2029）  
 小餅如嚼月（詩・卷43・p,2237）  
 玉盆沉李灑清水（詩・卷46・p,2492）  
 能消瘴癘暖如薰（詩・卷48・p,2638）  
 萸葉清新卷翠雲（詩・卷48・p,2638）  
 折腳鑪邊煨淡粥（詩・卷50・p,2761）  
 喜新嘗（詞・p,741）  
 含滋嚼句齒牙香（詞・p,743）

点心の味については果物が圧倒的に多かったが、テクスチャーでは逆に「餅（小麦粉を捏ねて焼いたり揚げたりして作る食品）」や「粥」を言っているものが多い。「餅」には「酥（サクツとした）」「脆（カリツとした）」などのクリスピー感ある表現が多い。「粥」は濃度が問われている。

「脆齏紅螺醬（さっくり濃厚なアカニシ貝味噌）」という、凝った複合表現も見える。

### ③点心 si

- 人人皆作肥皮饅頭矣（文・卷70・p,2235）  
 不眠聽粥鼓（詩・卷18・p,943）  
 梅子欲嘗新（詩・卷20・p,1041）  
 冰盤薦琥珀（詩・卷24・p,1269）  
 棕筍狀如魚（詩・卷33・p,1756）  
 紫餅供千家（詩・卷34・p,1846）  
 蠻果粲蕉荔（詩・卷39・p,2099）  
 奇苞零落似晨星（詩・卷37・p,1996）  
 枇杷已熟粲金珠（詩・卷39・p,2103）  
 桑落初嘗灑玉蛆（詩・卷39・p,2103）  
 青浮卵碗槐芽餅（詩・卷39・p,2103）  
 炊裂十字瓊肌香（詩・卷39・p,2112）  
 冰盤薦此頰蚪珠（詩・卷39・p,2122）

似開江鱈斫玉柱（詩・卷39・p,2122）  
 風欺紫鳳卵（詩・卷39・p,2152）  
 面目太嚴冷（詩・卷39・p,2153）  
 悵惘荔子何時丹（詩・卷40・p,2191）  
 炎雲駢火實（詩・卷40・p,2193）  
 端露酌天漿（詩・卷40・p,2193）  
 爛紫垂先熟（詩・卷40・p,2193）  
 廟俎薦丹荔（詩・卷40・p,2196）  
 丹荔破玉膚（詩・卷41・p,2281）  
 黃柑溢芳津（詩・卷41・p,2281）  
 黃甘遽如許（詩・卷49・p,2707）  
 青擣炒軟飢腸（詞・p,233）

点心の視覚表現では果物が多く、とりわけ荔枝が突出している。「丹荔」が目立ち、皮の赤みを「丹」と表現している。また「紫餅/紫鳳卵/爛紫」のように、「紫」字をよく使っている。

蘇軾は点心を形容するだけでなく、人やもの（雨など）を形容する場合にも飲食形容表現を用いることがある。しかし、それは「詞」に限られている。

點酥娘（詞・p,579）  
 弄色金桃新傳粉（詞・p,815）  
 微雨如酥（詞・p,861）  
 酥胸斜抱天邊月，玉手輕彈水面冰（詞・p,925）  
 特に「酥」を好んで使っているようである。

#### 4. 蘇軾の傾向

蘇軾作品に見える飲食形容表現を概観すると、以下の点が彼の傾向と考えられる。

- 「水」に関しては視覚表現が極端に少ない。用語も「白・緑」など、平凡である。フレーバー（味・香り）は「鹹（塩からい）・苦」などのマイナスイメージがある語を用いることで、素晴らしい水を際立たせている。テクスチャー（質感）では「清・寒」がキーワードとなっており、すっきりと冷たい水への志向が窺えた。
- 「茶」についての形容表現は総体的に少ない。フレーバーでは「苦」、テクスチャーでは「新」、視覚では「白」が特徴的と見られる。
- 「酒」の表現は多い。フレーバーが最も多く、しかも「文」と「詩」では傾向が異なる。すなわち、「文」では「甘・苦」などが目立つが、「詩」ではほとんどが「美」であった。

テクスチャーでは多くが「濃・薄」だが、「鹹」も散見した。さらに、蘇軾は現代のワインソムリエが述べるような形容表現もしていた。

○「菜（料理）」の形容表現は予想通り最も多く、蘇軾の食通振りが証明された。フレーバーが最多で「甘・苦・香」がよく使用されている。しかし、酒で見られた「文」「詩」の違いは見られない。テクスチャーは「爛・軟・嫩・軽」などのやわらか系が多く見られた。視覚表現では様々な色を使っている点、「紫」が好まれている点、江南の食材が多く取り上げられている点が特徴である。

○「点心（果物を含む）」も比較的多い。しかし、フレーバー・視覚ともに果物が大半であった。フレーバーは「香・甘・苦・酸」などが見られた。テクスチャーは「餅・粥」が多く、「餅」では「酥・脆」などのサクサク系、「粥」では「濃・薄」が見られた。視覚表現については、「菜」と同様に「紫」が見られた。荔枝を「丹」と形容した。さらに、人や雨を「酥」などと形容することもあった。

## 5. おわりに

蘇軾作品における飲食形容表現の傾向を考察すると、「苦・鹹・薄」などのマイナスイメージを喚起する言葉が比較的多く見られた。池間が以前調査した章回小説（『水滸伝』『金瓶梅』『紅樓夢』）・白居易・高啓作品においては、このようなマイナスイメージを持つ語はほとんど見られなかった。<sup>17)</sup> これは蘇軾作品の大きな特徴であると指摘できる。その多くは文字通り良くないという評価であるが、「白酒微帶荷心苦」においてはプラスイメージとしてとらえている。

また、水の項目を新しく作る必要があったことから、蘇軾は水に対する形容表現が大変多い。これは、茶との関連が考えられる。また、自ら酒を作ったり新作料理を考案したりすることが好きだったので、自然と水に対する視線が強まったのかもしれない。

本稿は日本文体論学会第95回大会（日本大学薬学部・2009年6月）において口頭発表したものに加筆修正を加えたものである。

## 注

- 1) 『世界大百科事典』第16巻 p.399 平凡社 1988年
- 2) 池間里代子「中国章回小説にみえる飲食形容表現について」流通経済大学論集Vol.42, No.3, 2007年1月 pp.21-26
- 3) 島田淳子・今井悦子『調理とおいしさの科学』放送大学教材88182-1-9811, 1988年 p.46
- 4) 星祐二「テクスチャーの心理」『食物心理学』(株)食品資材研究会 1991年 p.65
- 5) 中山時子『中国食文化事典』角川書店 1988年 p.518
- 6) 川端晶子『食品とテクスチャー』光琳 2003年 p.258
- 7) 中山時子前掲書 p.448

- 8) 許慎『説文解字』, 中華書局, 1963年, p.313。「醎, 酢漿也。」
- 9) 〔陸游, 立春前一日詩〕重溫壽酒屠蘇醎。諸橋徹次『大漢和辞典』, 大修館書店, 1960年, 卷11, p.403。
- 10) 〔蘇軾, 謝鬪景仁送紅梅栽詩〕酸醎不堪調眾口。前掲辞典による。
- 11) 〔蘇轍, 詩〕食飽山茶醎。前掲辞典による。
- 12) 池間里代子「白居易作品に見える飲食形容表現」流通経済大学論集 第44巻第3号 2009年11月
- 13) 諸橋徹次『大漢和辞典』1960年にも未収録
- 14) 田中清一『中国食物事典』柴田書店 1991年 p.155
- 15) 蘇軾の友人文同が洋州(現. 陝西省洋県)に赴任し, その土地のことを詠じた詩を蘇軾に贈った。蘇軾は返事に「洋州は筍の産地だから, 君はさぞかしたらふく食べていることだろう」という内容の詩を書き送った。その詩が着いた時文同はたまたま妻と筍を焼いて食べていたが, 手紙を開き詩を読んで失笑し, 飯を嘔き出したという。中山時子前掲書p.500
- 16) 『晋書・張翰伝』で, 張翰は故郷の味が恋しいといって辞職し帰郷した。中山時子前掲書 p.316
- 17) 『紅樓夢』に「油膩膩」2例・白居易に「麵苦」と「腥鹹」が2例・高啓に「秋腥鱸」のみが見られた程度である。

#### 参考文献

- 陳素貞『北宋文人の飲食書寫 以詩歌為例的考察』大安出版社 2007年  
林語堂・合山究訳『蘇東坡』講談社学術文庫 1987年